

## 入選

### 「暗い森のサーカス」

マチゲリータ (PHP 研究所)

情報メディア学科 保延杏奈

もしも願いが叶うとしたならば。あなたは何を願うだろうか。その代償に魂が擦り切れるまで働かなくてはいけないとしたら。それこそ簡単な願いでは済まされないし、願わない、という選択肢もある。だがしかし、どうしても叶えたくて、叶えなくてはいけないとしたら…願わないという選択肢は選べないであろう。

私が読んだ「暗い森のサーカス」という本はそんな状況になったキャラクターたち7人が描かれている。この本の元は今流行りの voaloid の初音ミクを使った曲から広げられたものである。だが、この小説ではその voaloid が登場するのではなく、オリジナルのキャラクターで展開されている。全員が一つの森の中に居を構えていて一人ひとりが違った問題を抱え、苦悩している者もいれば災いに降りかかられるものもいる。小説を読み進めていくとキャラクターが悩んで困った時の登場する謎の人物がいる、と言ってもすべてに現れるわけではない。そのキャラクターとは「団長」である。誘い文句はこうだ、「願いを叶える代わりに私のサーカスで働かないか」というもの。一人目のアンナには歌姫として。二人目には演者として。三人目にはピエロ、といった具合に役割を与える。その代わりに願いを叶えていく。そうして「団長」が登場する「御伽噺」の最後には大きな蟲の口のような入口に入っていく。そのあとの話は描かれていない。何故か。その疑問は最後の「物語」で解決することになる。最後の話は勿論「団長」の話である。彼もまた苦悩し願いを叶えてもらった人物なのであった。

私は今まで生きてきてこの悩んだり困ったりしたことはあったが小説のような苦悩に悩まされたことはなかった。だが、この「御伽噺」を読む際にキャラクターになりきって読んでみた。苦しかった。気持ち悪くなった。嫌悪感も覚えた。そうした時、ふと横で誰かが囁いたのだ。

「ようこそ、私の『サーカス』へ」と。